



道守

みちもり

MICHIMORI
TSUSHIN

通信

vol.19 秋号

特集

みちづくし in みやざき 2009

座談会

「新たな公」を考える

巻頭随想

道は生活や自然との「出会い」の場
東国原英夫（宮崎県知事）

宮崎 風景街道を行く

東九州伊勢えび街道・日南海岸鵜戸街道

道守の輪

厳しい状況乗り越えて「支援を継続」—九州地整局

東国原英夫

(宮崎県知事)

H I G A S H I K O K U B A R U H I D E O



道は生活や自然との「出会い」の場

「道」って、新しい公共空間みたいなものだったり、ふれあいの場だったりするんです。僕が走っているとすぐ分かるんでしょうね、「あっ！知事だ。東国原だ。」なんて具合です。そこで、声を掛け合ったり、挨拶したり、信号待ちで会話出来たりするんです。「道」って新し

かったですね。沿道に小学生や児童達が自分で苗を植えたところなんかもあるんです。

知らない街に行ったら走る事が多いんですが、その道路はどうなっているのか、どういう事情なのか、その地域の道づくり・街づくりがよく分かります。

二十一世紀は地方の時代だと思っています。だから県知事をやっているんです。地域を作るには「地域力」しかないと思っています。行政がやらなきゃいけない部分も沢山あるんですが、自分達で自分の町とか村を、或いは街づくりをしようというのが基本だと思います。これが自治の基本中の基本ですから、「道守」さん達も含めて、僕は心から敬意を表したいですね。この人達が二十一世紀の主役ですよ。

プロフィール

1957年宮崎県出身、80年専修大学経済学部卒業、00年早稲田大学第二文学部入学、06年早稲田大学政治経済学部退学、07年1月、第52代宮崎県知事就任。



道守の皆様方も、今後も頑張っ、地域の活性化にご尽力いただけるとありがたいと思います。

地方の道路は必要ないといった乱暴な議論もあるわけですが、立派すぎる道路は必要ないんですけど、「命の道路」っていう言い方もあるんですよ。そういった意味を地域の皆さん、行政の皆さんが理解し把握して、道路の在り方を考えていくことは大切ですよ。

い公の場というか、それを考えるテーマだったりするんじゃないでしょうか。「道」は交流の場や物を運ぶといった事だけじゃなくて、新しい空間でもありそうな気がします。生活との出会いとか自然との出会いもあると僕は思う。そういった出会いがあるので、僕にとって「道」はとても重要なものなんです。歩く・走るスピードでの整理も重要かと思っています。それが地方の発展とか活性化に役立つのではないのでしょうか。

道守九州会議 設立趣旨

古代から、道は人々の共有財産であった。力を合わせ道普請し、守ってきた。道は街を作り、産業を興し、文化を運び、人々を結びつけた。つい、この間まで、子どもたちがキャッチボールし、縄跳びなどで、明るい歓声が響いていた。お年寄り、縁台で将棋をさし、ほうきで道を掃き、水を撒くお母さんの姿もあった。そんな「日本の原風景」は何処へ行ったのだろうか。

確かに、高速道路やバイパスなど、道は整備され、日本の高度経済成長を支え、豊かな暮らしをもたらした。しかし、多発する事故、渋滞、大気汚染、騒音。何より、車優先社会は、人々の心を道から遠ざけてしまった。自宅前のごみや雑草さえ知らん顔。それどころか、空き缶のポイ捨て、家庭ごみの投げ捨てが日常的な風景になってしまった。

そんな現状に、心を痛め、清掃や花壇作り、植樹に取り組む人々が増えていく。行政まかせから、「道はみんなの財産」という意識と行動。新しい「公」への動きが芽を出しているのだ。行政と住民が手を携えて「協働」で道を守るという新しい意識の潮流。そこから生まれた九州各地の活動が、合流し、大きな流れになってゆく。「道守九州会議」の誕生だ。

道守。その由来は遠く万葉の昔にさかのぼる。道を管理し、守り、旅人の飢えと渴きを癒す果樹を沿道に植えたという。現代の道守は住民と行政が協働し「道」と人の新しい縁を紡ぐ。

さあ、新しい道に一步踏み出そう。



「青島パーキング」宮崎県宮崎市大字折生迫

CONTENTS

- 01 巻頭随想
道は生活や自然との「出会い」の場
東国原英夫 (宮崎県知事)
- 02 特集
「新たな公」をテーマに
みちづくし in みやざき
- 04 座談会
「新たな公」を考える
- 06 各県会議活動
- 10 道守の輪
厳しい状況乗り越えて「支援を継続」—九州地整局
- 11 私たちの道守活動
- 14 わたしの好きな道
引き継がれていく道守の精神
高尾忠志
- 15 海外道事情
渡邊綱纜
- 16 風景街道だより
九州風景街道推進会議 基本問題小委開く
- 17 風景づくりの事始め①
「ちょっとした気配り」が景観形成
石橋知也
- 18 宮崎 風景街道を行く
東九州伊勢えび街道・日南海岸鵜戸街道
- 20 道守人物伝
- 21 道守たちのトピックス

表紙画：久富 正美

1935年福岡県生まれ。「小さい旗」同人。グループ「五架会」会員。

「新たな公」をテーマに

みちづくし in みやざき

「みちづくし in みやざき」が10月23、24日、宮崎市青島地区で開かれる。「みちづくし」は毎年1回、九州各県の道守会議が主催して開かれ、今年は昨年の鹿児島に次いで6回目。

23日は午後1時30分から、青島神社儀式殿で開会式。基調講演、各県道守会議の活動報告などの全体会議を行い、その後、県立青島亜熱帯植物園に移動し、交流集会を行う。24日は現地体験学習会で、青島コース、日南コースが用意されている。

今回のテーマは「あなたと私でつな

ぐ道―新たな公ってなんね」。行政とNPOなど市民団体が連携、協力して「公共」の事業をどのように進めるかを主テーマとして論議が行われる。これまで公共事業、社会資本整備などは「行政」がもっぱら行うもので「民

「新たな公」と言う言葉が聞かれるようになった。この言葉の意味をいろいろ考えると我が国の経済社会の成熟化と行政（いま注目の官僚？）、市民活動、企業に対するイメージが大きく変化しつつあることを実感する。

10年ほど前、私は東京で公益法人の研究員として仕事漬けの日々を過ごしていた。日々発注元の官庁との深夜までの対応を行い、このまま過労死するのではと思いながら満員の最終の地下鉄や深夜の残業タクシーに乗っていた日々を思い出す。仕事と生活の場所と時間が分離し、住むところはただシャワーを浴び寝るだけの場所であり、休みは少ない睡眠時間の復元回復のためだけだった。職場が唯一の人間関係の「場」だった。

行政も企業もその個々の目標に向けて自ずから合理的と考える手法を用いて努力し、成果をあげて今日の経済社会を作り上げてきた。人々もその組織の一員として努力し豊かさを享受する

九州の道守さん、ようこそ宮崎へ。

この交流会も鹿児島から引継いで6回目を迎えます。当初は、「道守」ってなんね？というところから始まりましたが、「道守活動」を行政のみなさんと共に連携を図りながら進めていくことによって、パートナーシップを育むことができるようになりました。さらに道守会議で意見交換や交流を図ることにより会員間のネットワークが形成されるようになったことは、大きな成果といえます。

道守（志民）は、自主的な取り組み、活動が主体です。それぞれの活動を通して「何か見えてきたもの」、それは、新たな「公」のカタチ・ステージです。「新たな公つ



点から線へ、線から面へ

みちづくし in みやざき2009実行委員会

実行委員長 日高 晃

線から面へ拡げていく「ムーブメント」でありたいと宮崎の道守は考えます。ロードパーク発祥の地「青島」では、地域が一体となって道守さんをお迎えします。道守さんの交流の輪がさらに広がり、今後のさらなる活躍を祈念してあいさつに代えさせていただきます。

道守みやざき会議も平成16年の発足からちょうど丸5年目が経ち、私どもが作り出した10月の道守月間としての県内道守一斉活動も定着化してきました。その10月にこうして「みち



手づくりの「みちづくし」 in みやざき

道守みやざき代表世話人 新名 典忠

今回のみちづくしは、民間と行政のパートナーシップを発揮して、すべて手作りでおこなってきました。手探りのなかで進めて参りましたので何かと不行き届きの所

もあるかと思いますが、精一杯、九州の道守の方々をお迎えします。どうぞ、この手作り感を楽しんで下さい。また、宮崎は花のまちづくり運動にも取り組んでおり、来年4月23日〜24日は「第18回全国花のまちづくり宮崎大会」を開催する予定です。この取り組みも宮崎の道守

は受益者の立場だったが、これからは両者が「協働」して行う新しい形が求められている。

その先行例として、道守九州会議は道路の花壇、植樹などの美化活動、ポイ捨て撲滅などの活動を展開、全国的

ことができた。その一方で、地域社会にはもともと住民がお互いに助け合い

自らの地域社会を創る「公」の領域が存在していた。しかし、物質的な豊かさを享受することと引き替えに、人々の職場と生活の場の分離が進行し、「公」は行政（官）が担う「かたち」が都市を中心に定着し、人々の地域社



「新たな公」は組織から志縁（ネットワーク）へ

根岸 裕孝（宮崎大学）

会についての関心は希薄化していった。

我が国の経済社会が成熟化するなかで、その「公」と「官」のあり方が今問われている。これまでの成功体験が問われ、社会（公）として解決すべき問題が山積しつつある。その解決にむけて「行政」「市民」「企業」のそれぞ

れの立場で何ができるかが、それが「新たな公」である。

私は、かかる背景のなかで「組織」を超えた「志縁」の重要性を指摘したい。地域社会で多様な問題が山積するなかで、その解決にむけては多様な主体の連携が不可欠になる。しかしながらこの「連携」は、言葉で言うほどう

まくいかなない。行政担当者のやる気が高ければ異動するまでじつと耐えるし

かなくなる。組織という言葉よりも立場の違いを超えた「志」こそ新たな社会の原動力である。経済社会が成熟化する今日、知識社会の時代と言われる。個人の持つ「知」や「志」を通じたコミュニケーションやそれに基づく「共

を行い「新たな公」について知識をより深めるのが狙い。

道守みやざき会議は10月を道守月間と定め多彩な活動を行っており、日本風景街道づくりでも多くの挑戦を行っている。

感」が新たな価値形成の原動力となる時代である。「行政」の持つ縦割り、官尊民卑と言われた組織文化を超えてよりよい社会を創りたいと思う志を持つ「行政職員」や、行政にお願いする「地域づくり」から孫や子供に誇りを持つて引き継げる地域社会づくりに取り組む「住民・市民」等との「志」を持つ人々のネットワークこそが新たな公の主役になると思われる。

経済社会の不透明感のなかで明るい未来づくりが求められている。「新たな公」は、安易な行政コスト削減や行政生き残り論を超えた議論とともに、志と実践のプロセスを重視した取り組みとなることを期待したい。

根岸裕孝（ねぎしひろたか）1966年生まれ。栃木県出身。1992年九州大学大学院経済学研究所修士課程修了。同年（財）日本立地センター入所。研究員として産業立地・地域経済政策の調査研究に従事。2001年宮崎大学教育文化学部講師。助教を経て現在に至る。

「新たな公」を考える

参加者

安立清史氏 九州大学大学院人間環境学研究院准教授

阿野史子氏 NPO道守長崎理事長

森山誠二氏 国土交通省福岡国道事務所長

司会

玉川孝道氏

道守九州会議副代表世話人

玉川 本日は、最近よく聞かれる「新たな公」をテーマに、議論をいただきます。

森山 昨年7月に「国土形成計画」が閣議決定されました。人口の都市集中、

善意のつながりのみでは限界も、安定した活動への契約制度を ● 森山氏

限界集落の増大などの動向下での今後の国土管理のあり方は大きな課題で、特に行政体制の制約のもとでの「新たな公」の担い手は重要な課題である。



「公共」という言葉の中で、昔は社会が複雑ではなかったの

「公」が多かったが、最近では「共」が増え、「公」が相当減ってきており、この「共」部分を「新たな公」と理解している。この「共」の部分を誰が担うのか、

市民等の新たな担い手が注目されている。

阿野 道守長崎会議の地域ブロック組織も充実し、活動も多様化してきたのでこれら地域代表者や道守活動支援者を中心としたNPOを創設した。

長崎大学での「道守講座」（橘などの道構造物の診断や異常点検、発見、通報等のメンテナンスサポートを担う人材を講習、試験などで認定し活動を促す仕組み）、市民でも参加できる資格もあり、ここの取組みとも連携して



割も、領域が拡大また縮小するといった2次元的な性格から官、民それぞれの意識や行動の質などの面も含めた3次元的になってきている。

アメリカではNPOは大きな雇用マーケット 専門家集団として位置を獲得 ● 安立氏

玉川 NPO、一般法人、企業、大学等々、形態はどうであれ目指すものを意識した人々が行動を始めている。それらが「新しい公」としての意義として意識され始めていると思う。

玉川 これまでの行政は「お上」で、一手引受型、民は行政に対し、批判と注文をするという姿があった。また従来の民参加では審議会やPIなど「意見を聞く」という時代であったが、これから「新たな公」へ行政側はどう向

き合おうとしているか。

森山 行政体制の現実からも「新たな公」は行政側のニーズとして存在している。主体の形態や契約手法等も課題であり、人間関係のつながりのみでは継続的な活動を維持していただくことは難しく、やはりきちんとした契約制度を確立する必要があると思う。

安立 今後は行政（官）も民（私）も少なくなり、その中間に位置する公が大きくなる姿も想像される。

ポストンマラソンはNPOが主催し各種ボランティアが運営にあたり、丸々2日間、道路を完全閉鎖し、市民みんなが使用し楽しんでいる。日本では道路は官に管理（警察含む）されすぎていて公も民も入れない、官の一方



能だし、NPO等同志の連携もこれから重要と思われる。長崎大学の取組との連携も道守の名の縁で一緒にやろうとなった。道守の質と力量のアップに貢献していくと思う。

安立 現在のような厳しい時代は10年20年先をみて考えるチャンス、大学で遊び、会社に入れば会社組織の環境下で定年まで過ごし、退職すれば何もない空虚な世界に、会社の外にある社会を意識しない傾向だった。今は変革期で、「新たな公」のマーケットにも注目すべきで、また生き甲斐などに人材意識も傾斜してきている。

阿野 長崎道守では多くの人々が新たな意識に燃えてくれている。行政がやれない、だけど民（私）では出来ない、その領域を担おうと。多くの得意分野の人材を繋いでゆけば出来るのはと。

玉川 現在、国等では多くの施策と補助金があるが、全体的な広がりや成長を促す中間組織への考えがなく、行政自体にも「新たな公」に向き合う組織、体制もないに等しい。また風景街道などを例にとっても道路、観光、農林水

産等々、所管省庁が多く関連するが連携が存在しない。

森山 道守会議や風景街道などは中間組織の例だが、やはり活動を円滑に継続いただくためには契約制度をしつかりすべきで、人の善意によるつながりのみでは限界がある。また役所も人材に頼ることも大事だが組織的に安定した関係を築くことも重要だ。

より大きな役割を ● 阿野氏

また、人材の募集や斡旋、育成などを担うNPO等もあっていいし、行政経験を持った多くの翻訳家のつながりを活かしていくことも有効と思う。

安立 顔を見せない（見られない）、責任をとらない、リーダーにならない、の意識が多い、やはり顔が見える活動が重要、宮崎交通の故岩切章太郎氏などはNPO的な顔を持たれ、想いと情熱を発信され、「新たな公」へのボタンを押されてきた方々だ、組織や規模もあるがやはり人間であり言葉だけでなく顔を向け相手を見て意思を疎通することが大事。

人を引きつけるリーダーと、組織を安定的に運営する制度、体制が重要だ。「新しい公」とは「人間力」とも位置づけたい。



玉川 「新たな公」の担い手、主体の質や力量といった面も重要と

いこともあり日本の大学では未だ動きが少ないと感じた。

森山 地域のことは地域の人々が最もよく知り関心もある、やはり「任せる」ための契約制度、とやる気を促す仕組みが重要だ。

阿野 道守は元々、根を張った組織がベースとなっている、色々な仕事も可

個々活動を繋ぎ大きな活動へ育てる中間組織が重要 ● 玉川氏

玉川 アメリカのような雇用市場がないと育たないし発展しない。

阿野 アメリカではNPOが社会を大きく支えているが、日本はその輸入物を未だうまく発展できていない、企業や財団、社団などの各種法人の隅にある小さい存在で、NPOサポート組織も不十分。日本の場合、行政とNPOとの関係は、参加してください（権限は渡さない）の形だが「任せる役割」がないと育たないし発展しない。

個々活動を繋ぎ大きな活動へ育てる中間組織が重要 ● 玉川氏

いこともあり日本の大学では未だ動きが少ないと感じた。

森山 地域のことは地域の人々が最もよく知り関心もある、やはり「任せる」ための契約制度、とやる気を促す仕組みが重要だ。

阿野 道守は元々、根を張った組織がベースとなっている、色々な仕事も可

福岡

活動の輪広げ
笑顔で無理なく続ける

〈道守柳川ネットワーク〉



道守柳川 ネットワークは「できる人が、できることから」を合い言葉に、平成16年8月より会員約200名で活動を始めました。現在、婦人会、老人会、高校、企業など31団体約600人の会員となり活動の輪が広がっています。

活動内容は、行事開催（白秋祭・さげもん祭）に合わせての年2回の清掃活動を始め、「道」をテーマにした研修会（勉強会）や意見交換などを行っています。

今後とも、柳川に訪れる観光客の方々への歓迎の気持ちと、ふるさと柳川を美しくしたいという思いで活動を続けていきます。

（道守柳川ネットワーク 代表 山田三代子）

〈北九州市道路サポーター〉



北九州市 道路サポーターは清掃用具や花苗の支給など市の支援を受けながら、笑顔で無理なく長く続けることをモットーに楽しく活動しています。毎年2月にサポーターが集う総会での皆さんとの交流はとても楽しく励みになっています。

活動を通して地域の連帯が生まれ、また近所に困っている方がれば積極的にお手伝いしようという雰囲気醸成されるなど、サポーターの活動は地域づくりにもつながると感じています。

（北九州市道路サポーター 実行委員 小役丸シゲ子、井手口郁子、花田佐恵子）

長崎

志士たちが通った道
く街道づくりへの挑戦く

長崎街道は、長崎と北九州市小倉を結ぶ約228kmの街道です。江戸時代には、日本で唯一海外との交易を行っていた出島に通ずる街道として、非常に重視されていました。また、坂本竜馬などの幕末の志士たちが新しい知識を得るために通った道でもあります。

このように、長崎街道は街を創り、産業を興し、文化を運び、人々を結びつけていました。

しかし、車優先の社会は、都市化を進展させ人々の心から長崎街道を遠ざけてしまいました。そこで、「もう一度、私たちが使う道は私たちが守ろう」と様々な取り組みをしていたグループが集まり「道を守り、街をつくり、人を育てる」事を目的としたNPO法人道守長崎を設立しました。

NPO法人道守長崎では、活動の一環として、『長崎街道を活かしたまちづくりシンポジウム』や長崎街道を活かすことをテーマにしたワークショップを開催しました。

また、新たな近代化遺産を活かしたまち歩きコースづくりなどにも地元の人々と連携を図り参画しています。

市民と行政が『共通言語』で意見を



長崎街道をテーマにワークショップの様子

交換しながら対等な立場で街づくりを行っていくことが「新たな公」に繋がっていくと考えます。私たちは、『道』を活かして、魅力ある『街』創りに挑戦しています。

（道守長崎会議 副代表世話人 牧圭子）

佐賀

合い言葉は
『できる人が・できるときに・できることをしよう!』

三方を山に囲まれた自然の水と緑豊かな厳木町牧瀬。昭和63年のバイパス工事終了後、道路脇のくぼ地が不法投棄によるゴミの山となり、婦人会が力を合わせて撤去し、周辺の企業6社に協力をお願いして花畑が完成。できる人が、できるときに、できることをしよう。を合言葉に、「牧瀬杏会」の花植え活動が資金ゼロからスタートしました。以来22年間、花苗、資金の確



保、少人数による作業など四苦八苦しながらも、仲間への信頼、協力、団結を支えに活動を継続しています。今では、河川清掃や公園の清掃、道路のゴミ・空き缶拾い、空きビン回収、廃油回収と廃油石鹸づくり、生ゴミ処理からの堆肥作り（イーエム菌ぼかし作り）、県内植栽ボランティアへの参加など、少しでも環境崩壊を止めるきっかけになってくれる事を願って、また、活動を通じて学童や高齢者とふれあうことが、人のきずなと豊かな心を育み、人を育てることにつながることを確信して今後も活動を続けていきます。

（道守佐賀会議 副代表世話人 福山貞子）



熊本

よみがえる「大津街道」
並木樹を守り育てる

「街道並木樹を守り育てるボランティアの会」は、熊本市龍田町弓削校区を通る県道337号（旧跡大津街道）沿線で、文化財として管理保護されている並木杉に対峙する「ハゼの木」側が藪化し、絶滅が心配されたため、周辺緑化と旧跡大津街道の保存・景観美化に努めることで「森の都熊本」の魅力を図っています。更にヒートアイランド現象抑制、車の排気ガス吸収等、地球温暖化防止の一助とすることを目的として、県道337号（大津街道）沿いに植栽し、地域住民の手で守って



いく活動を行っています。具体的には、平成15年4月から毎年4回以上、並木植栽地の草刈り清掃作業を実施、毎年「道の日」の県下一斉清掃作業に参加、その他適時に、道路・沿道のゴミ拾い、並木の補植、手入れ、沿道の花植え等を実施しております。現会員の高齢化による活動会員の後継者づくり等「実効活動の永続性を確立すること」を今後の課題としています。

（街道並木樹を守り育てるボランティアの会 代表 黒木嘉次郎）

大 分 道路愛護団体として 国土交通大臣表彰を受賞

私たちは「社会への奉仕」の実践の場として、大分市顕徳町（北及び東を国道10号、南をJ R九州・日豊本線及び豊肥本線、西を大手通りに囲まれた地区）で、町域に接する延長約750mの国道10号の歩道部のゴミ拾いや除草の清掃活動を月一回実施しています。平成14年には国土交通省とボランティアサポートプログラム（VSP）契約を結びました。

毎年8月10日は「道の日」、大分河川国道事務所の職員の方々と共同作業し、活動のPR効果を一層高めています。



この長い間の実践から、当クラブに
る誇り②作業参加は明るく楽しい交流の場③老人として社会参加できる喜びなどの気運が高まったと確信しております。

本年8月、道路月間に際し国土交通大臣より道路美化の業績により表彰されました。日頃の活動やこれからの道守人としての思いを発表したいと思います。

（顕徳町デウスクラブ会長 藤澤真一）



宮 崎

伝統の歩きこう会 古の道を歩きながら歴史を学び、 今の道も大切にできる。

北郷小中学校には、二十数年前に始まった学校の伝統的な行事である「歩きこう会」があります。

歩きこう会の目的は「最善を尽くし、お互いに協力しあって完歩することにより、苦しみを乗り越える気力を養い、克服した喜びを体験させる。郷土の歴史や自然にふれながら、心身のリフレッシュと体力の増強を図る」です。

昨年は「北郷町史談会」の皆さんのご協力を得て、殿様街道と言われる飢肥街道を、学校から山坂屋関所跡まで二十キロ以上の距離を歩きました。途中の史跡では、史談会の方の説明を聞き、当時の様子を垣間見ることができました。

当日は、朝から曇り空で出発前は少し肌寒さを感じる天候でしたが、生徒たちも歩いていくうちに体が温まり、元気に歩いている姿を見ることができました。



歩き終えた。

発表者
日南市立北郷学園
9年 徳井 康記
8年 横山 佑輔
8年 窪 里乃
西山 未咲
※日南市立北郷学園は幼稚園から中学校までの一貫校です。

鹿児島 「守る」・「知る」・「生かす」 路地学の再発見！

流れ行く時代の中で変わって行くもの、変わらないもの。それぞれが、その時代の風景です。そのときどきの風景を次世代に伝えて行きたい。道にも「広い道」もあれば「小路」もある。さらには「路地」もあります。それぞれに使用目的・歴史・生活文化など、実はあるのです。

昔、子ども達はお寺の境内や路地で



遊び、色々な事を学んだ大切な空間であつたでしょう。
環境保全是、「次世代に引き継ぐ環境」という名のバトン」を合言葉で展開。

また、郷土のことを良く知り・知識を次世代に語り継ぐことが大切です。地域行事にも加わって住民参加で元気で活力のある町づくりに貢献するよう努力しています。

（宮ヶ浜自治公民館長 上野秀二）



コ ラ ム 青 島

ブーゲンビリアがシンガポールから日本に初めて上陸したのは、宮崎市青島にある県立亜熱帯植物園。その青島の地域住民を中心に組織された「まるごとブーゲン青島再勢委員会」では、ブーゲンビリアでまち全体を彩り、個性ある景観の創出に努めています。

また青島神社は神話「海幸彦・山幸彦」に登場する山幸彦をまつた神社です。その「海幸」「山幸」をキーワードに、ブーゲンビリアの咲く青島を訪れトロピカルロードなどを巡ってもらうための、まちめぐりマップを作成しました。

モニターアームも予定しています。サーフィンポイントのメッカでもある青島。一皮むけた姿が目に見えるのはもう間もなくです。



～ブーゲンビリアのまちづくり～ 「まるごとブーゲン青島再勢プロジェクト」



まちめぐりマップを作成するために現地調査を実施



ブーゲンビリア手入れ方法を熱心に学ぶ青島地区の人々

※青島再勢：青島地域にかつてのにぎわいを取り戻す（昔の勢いを再び）という願いが込められた言葉

厳しい状況乗り越えて 「支援を継続」 九州地整局

平成21年度の道守九州会議 第1回運営会議を開催

道守九州会議（樗木武代表世話人）の21年度第1回運営会議が8月3日、福岡市で開かれた。九州各県の道守会議代表が集まり、活動報告とそれぞれが抱えている問題点、課題を率直に話し合った。道路予算など厳しい状況の中での開催だったが、樗木代表世話人は「この状況乗り越え、さらなる発展を目指したい」と一層の努力と活動の活発化を要請した。

九州地方整備局の野口道路部長は「道路予算は厳しい状況だが、出来る限りの支援はする。一緒に道守活動を盛り上げたい」と行政と民間の「協働」を進めることを強調した。

20年度決算と21年度予算を了承、道守九州会議事務局を九州建設技術管理



協会（森将彦理事長）と九州地方整備局道路管理課に置くことが報告された。また事務局から「その地域の賛助会費はその地域の収入とし、九州一円に関連する企業の者は九州会議に入れる」方針が示され、了承された。

この後の意見交換では「公益事業費が精算払いであるため、苗代や保険料を立替払いしなければならない」（佐賀）「VSPの物品支給や保険料納入が遅れている」（大分）など活動支援の支給遅れにより、問題が生じている

道守長崎・みやざき・佐賀・ふくおか会議で 新リーダー登場

状況が報告された。また「支援資金の申請仕方、窓口が分らない」との質問に、樗木代表世話人は「資金についてはどの団体も苦慮している。情報提供の機会を設けたらどうか」と提言した。また、宮崎会議から資金不足への対応として「花苗は種から花を育てている」取組みが報告された。

最後に樗木代表世話人が昨年の「みちづくしん鹿児島」の開催について、道守鹿児島会議の努力に敬意を表し「大変興味深く、充実した内容だった」と評価。宮崎での開催に期待を述べた。

長崎、みやざき、佐賀の道守会議では代表世話人等が新たな体制へバトンタッチをされました。長崎会議では5月15日の総会で、中野勝利代表世話人（道守諫早ネットワーク）から宮田隆さん（小浜温泉57）へ、みやざき会議では6月25日の総会で日高晃代表世話人（橋通りフラワールード推進協議会）から新名典忠さん（みやざきフラワー



新役員を選出した佐賀会議の総会・意見交換会（9月30日）

ロードネットワーク）へ、佐賀会議では9月30日の総会において渋谷里美代表世話人（ロードネット佐賀）から山崎昌治さん（多久市そうじの会）へ各県の代表世話人が交替しました。さらに佐賀では、新たな副代表世話人に福山貞子さん（牧瀬杏会）を選任、そして長年、活動を牽引いただきました三原ユキ江さんが事情により役員を退任されることとなりました。

また、空席となりましたたふくおか会議の事務局長に佐伯毅さん（名島校区「花の架橋」実行委員会）が就任されました。

旧代表世話人等の皆様のご苦労に感謝申し上げますと共に、新役員のご活躍ご健勝を祈念いたします。

私たちの 道守活動

道に出て、道を見つめ、道の問題と向き合う。それは私たち自身の未来を考えること。歩いて楽しく、暮らして楽しい地域づくりのために、九州各地の道守会員が取り組むスタイルやアイデアなどもさまざまな活動を紹介いたします。

宮崎 地域からの報告 道守みやざき会議 北部ブロック

道守みやざき会議北部ブロック（通称・県北みちもり）は、道守みやざき会議から2箇所目のブロック組織として平成19年8月10日に発足しました。今年で3年目を迎え、現在25団体、約2100



名の方が活動されています。矢野初美代表のもと、「郷土みやざき」を愛し、慈しみ、少しでも地域が良くなれば」という想いから、さまざまな道守の方々が、道の清掃や道端の植栽の手入れなどに日々汗をかき頑張っておられます。

「県北みちもり」の多くの道守さん達が、自分たち出来る範囲で、そして何よりも継続することが大事だと考えて活動を続けています。そして、その道を利用する人や訪れる人たちに喜ばれることを嬉しく感じています。北川町に住む山岡昇さん・良子さん夫妻は、約15年前に、お孫さんが小学校に通い始めたのをきっかけに道の清掃を始めました。当時は通学路の道に草や木



が飛び出して危ない状態であり、月に2、3回草を刈ったり、掃除をしたりしてきました。お孫さんが卒業された今でも活動は続いていて、週に何度か落ち葉やゴミの清掃をしたり、花を植えたりして、地域の人達に大変喜ばれています。「私たちは趣味で活動をしていて、また、何よりもこれが健康の秘訣になってます。」と山岡さん夫妻は言われます。活動を続けて行く上で、楽しんでやることも大切なことだと感じます。

より多くの方に「道守」 活動を知って頂くために

「県北みちもり」では、より多くの方に「道守」の活動を知って頂くために、道の駅や公共施設など19箇所に活動紹介パネルを設置しています。より多くの人に道守さんの活動を知ってもらい、道守さんのつながりを深め、いっそう輪を広げていきたいと考えています。



宮崎



飛石花づくりボランティア会議

コスモスの花で歓迎!! 全国スポレク祭健康マラソン大会



私たちは国道10号を走るドライブバ―と小・中学校に通学する子供たちに花を見て喜んでもらおうと、昨年度区内の有志15名で発足しました。春はポピー、菜の花、秋はコスモス、マリーゴールドの花を植えて環境美化に努めています。

今年、10月18日に全国スポレク祭健康マラソン大会が予定されていきましたので、コスモスの花で全国の選手を歓迎しようと7月に花の種をまき、手入れをしてきました。

また、ここは小・中学生の通学路となっていますので、子どもたちが私たちの活動をとおして、自然の大切さ、ボランティア活動の大事さを感じてもらえればと考えています。

今後、この活動の輪が広がるよう頑張っていきたいと思います。
（竹林国興）



道守大川ネットワーク

福岡



清掃活動でつながる 連携の輪



私たちは、それぞれの団体で道路の清掃や緑化をしていましたが、独自で活動し横の連絡がなかったため、市全体の連絡会をつくり、交流・連携・学習を通して今後の活動を発展していくことを目的に市民団体、企業など29団体で平成18年1月に発足しました。

現在では参加団体も増え、市内の小・中・高生や老人会・ガールスカウト等老若男女の幅広い参加のもと、和気あいあい活動しています。活動は、大川市のイベントである「古賀政男記念大川音楽祭」や「木工まつり」などにあわせ、年3回会場周辺道路の清掃活動を行っています。

発足以来、活動回数は9回になりますが、多い時には400人の参加があり、大川市にもボランティアの精神が根付いてきているようです。

各団体が様々な目的をもって活動している中、ひとつの「道守」活動をきっかけに連携することによって大きな力となり、今後の市全体の活性化につながればと思っています。(大木康伸)



旧佐賀線跡地編

佐賀



緑化美化活動で癒しの場づくり



「花と緑あふれるまちづくり」を目的に平成4年4月1日に設立し、国道264号線沿いの市有地(旧佐賀線跡地)を利用して、手作りの花壇を2箇所設置し年2回花植えを行っています。

当初は各種団体が母体で、大人も子供も環境美化活動の一環として、土作り、施肥、花壇管理、除草、花の植え替えに官民一体となって取り組んでいましたが、近年は愛好者8名で維持管理を行っています。

この通りは車の往来が多く、人目につきやすい場所なので、四季折々の花を工夫を凝らして、こまめに植栽し、地域住民の憩いの場所ともなっており、美化意識の向上が図られています。

緑化功労者県知事表彰(平成7年)、みどりの愛護功労者建設大臣表彰(平成8年)、国土交通大臣表彰(平成20年)受賞を励みにまだまだ頑張ります!(飯盛光治)



小浜温泉57

長崎



「おもてなしの心」を新たな「公」の理念で



小浜温泉57は今年8月、国土交通行政功労表彰を受賞し、道路環境美化活動に大きな励みを頂き、会員一同大いに燃えています。

国道57号は観光地小浜温泉街を貫通する、長崎の奥座敷、雲仙への登り口、夕日が映える橘湾沿いの観光地の大動脈です。

今年は、昔の通り名も復元し温泉散策の観光客にも好評です。地元のお年寄りから子ども達への「通り名」の由来についての会話が声高に弾んでいます。海岸通りは、ジャカランダ通りと命名しました。世界の3大花木の一つ紫雲木です。樹高10数mの花木、きれいな紫色の花びらが見上げる人びとの心を癒してくれます。今年のジャカランダフェスタは多くの観光客で賑わいました。

小浜温泉57は、地域住民の満足度、観光客へのおもてなしの心で、地域づくり、人づくりへと活動の輪を広げています。その心は、自分たちの街は地域住民の汗と知恵で!です。新たな公としての役割と責任を肝に銘じ、今年から子供・孫達への環境遺産、雲仙市民100年の森「落葉樹植栽」に挑戦します。(宮田隆)



熊本



道守くまもと会議

熊本全県下道の日一斉清掃



毎年、八月は道路ふれあい月間に指定されています。このため、8月10日(月)の道の日、県内一斉清掃が行われました。

全県下130ヶ所に及ぶ関係箇所の協力の下、約3千人が参加。早朝7時、

熊本市内の白川公園に約150名が結集。清掃結団式の後、水道町交差点を中心に、各々のルートで清掃を開始。出勤前にも関わらず「いつも使っている道のために」と、中にはスーツ姿での参加者も見受けられました。厳しい暑さの中、県内各地で清掃を実施して頂きました。

ありがとうございました!

(中村幸子)



大分



頤徳町デウスクラブ

「社会への奉仕」の実践の場、毎月の清掃活動



頤徳町デウスクラブは平成10年に結成されました。会の名称「デウス」とは本町中央部に大友宗麟が建立したキリスト教会がこの地にあったとされたことから、その名を拝借しました。

当クラブの事業は、①会員の健康、②相互の助け合い、③社会への奉仕の3つの柱を掲げ、年間多彩な行事に取り組んでいます。私たちはこのうち「社会への奉仕」の実践の場として、町域に接する延長約750mの交通量の非常に多い国道10号の歩道部のゴミ拾いや除草等の清掃活動を月一回実施しています。

私たちはこの長い間の実践から、当クラブに①自分達のコミュニティを美しく守る誇り、②作業参加は明るく楽しい交流の場、③老人として社会参加できる喜び、などの気運がかもし出されたと確信しております。(藤澤真二)



鹿児島



ゴミ「ゼロ」の国道3号を目指して



私たちが国道3号の清掃ボランティア活動(ボランティアサポータープログラム)を始めて、丸4年が経とうとしています。月に2回、朝8時から国道3号の歩道を延べ約2kmにかけてのゴミ拾いが主な活動内容です。市街地という事と通勤・通学時間帯という事もあり、歩行者や自転車の往来が激しい中での活動ですので、人目に付く蛍光色のスタップジャンパーを着用して、安全確保に努めながら行っています。

4年前の活動当初は大量のゴミがありました。が、今では以前に比べて少しずつゴミの量が減ってきているように感じております。通勤・通学中の方や地域住民の方々に「おはようございます。」「いつもご苦勞様です。」などの温かい言葉を頂くと、「清掃活動を続けて良かった。」と、活動の更なる励みになっています。今後は、地域住民の方や歩行者・自転車で行き交う方が「ゴミがない綺麗な道だな。」と思ってもらえるように清掃活動を続けて行きたいと思っています。清掃活動が必要ないような、「ゴミ「ゼロ」の国道3号」を私たちの最終目標にして、今後も活動を続けて行きたいと思っています。(上野飛雄馬)





南仏コートダジュール、
カンヌ市の街並

私もその後南フランスを訪ねたが、残念ながらミモザの花の季節ではなかった。美しい海岸道路の景色に見えながら、遙か宮崎の黄金海岸に思いを馳せたことだった。

昭和四十年頃、フランスからジャスパール、バンフに



ロッキー山脈の山なみ



財宮崎県芸術文化協会
会長
渡邊 綱纜
宮崎交通在職46年、宮崎産業経営
大学教授（観光学）、宮崎市社
会福祉協議会会長を経て、現職

海外道事情



昭和三十二年のことである。南フランスのコートダジュール（紺碧海岸）を一台の観光バスが走った。

最前列の席には当時、宮崎交通の社長で、後に「宮崎県観光の父」と言われた岩切章太郎氏が座っていた。

ガイドが、さかんに、コンテダジュウ、コンテダジュウと説明する。岩切社長がその意味を尋ねた。

ガイドは、「この海岸の道路には、ミモザの木がたくさんあるのにお気づきで

しよう。毎年三月頃には、濃い黄色の美しい花をいっぱい咲かせて、黄金海岸になるのです。それがコンテダジュウです」と、答えた。

岩切社長は、黄金海岸という言葉に心を打たれた。そうだ、ミモザの花を日南海岸に植えて、黄金海岸を作ろうと、夢をふくらませた。ところが、ミモザは台風にも弱いということがすぐ分った。幸いに海辺の民家で、秋になると黄色で輝くように咲く南米原産のコパノセンナを見つけ、さっそく栽培して、次々に日南海岸に移植した。こうして、宮崎の黄金海岸が実現したのである。

ガイドは、紺碧海岸を間違えて黄金海岸と説明したのだったが、岩切社長は、お陰で私の夢がかなったと、後々まで語り草にしていた。

南仏・コートダジュール

引き継がれていく道守の精神

大分・由布院 湯の坪街道

由布院観光のメインストリート「湯の坪街道」の状況はあまり芳しいものではない。押し寄せる観光客と観光資本に暮らしたの場が脅かされている。言葉にしろく、マーケットにのらない、けれど地区住民が大切に、丁寧に築いてきた「ゆふいんらしき」が埋もれ、見えづらくなってしまった。その状況が街道の風景を落着かないものになっている。

しかし、それでも私は湯の坪街道が好きだ。湯の坪には、自分たちの道を守るために日々奔走している人があるからだ。湯の坪街道は「暮らしの道」であり、まちづくりの「現場」でもあるから、彼らは365日二十四時間、常にオンラインで闘っている。その苦労ははかり知れない。湯の坪の景観や交通の取り組みで一緒にさせていただいている太田洋一郎さん（とこやおおた）や桑野和泉さん、池辺秀樹さん（玉の湯）と街道を歩くと、次々と街道の問題点とその対策が話題にあがる。その熱意とエネルギーにいつも圧倒される。

平成十九年二月、湯の坪の住民は、「湯の坪街道周辺地区景観計画・景観協定・紳士協定」を全会一致で決定した。その策定にあたっては、地区住民自身が膨大な量の現地調査を行い、その結果をもとに世代や立場を超えてじっくりと議論する場として委員会や説明会を繰り返し開催した。地区全体の危機感が強く、意識が高かったことで、具体的に現実的な議論が行われ、地区住民が積み上げてきたものに添った、地に足のついた計画がつくられた。地区での決定から一年半、ルールは地域に定着し、一定の成果をあげている。

由布院がもっと無名だった頃から、湯の坪の人びとは街道沿いのベンチに集まり、お酒を酌み交わし、地域のことを語り合いながら、街道の風景をつくり、守ってきた。その遺伝子は、太田さんや桑野さんの世代に確実に引き継がれている。その次の世代にもきっと伝わっていくのだろう。そうして世代から世代へ引き継がれていく精神こそが、地域の力の源であることを私は湯の坪街道で教えられた。



プロフィール
高尾 忠志
九州大学大学院特任助教。湯の坪街道デザイン会議アドバイザー。湯の坪街道周辺地区景観協定委員会事務局。湯布院景観協議会アドバイザー。

岩切章太郎氏の「夢」を抱いて 日南を黄金海岸へ

ら帰国したばかりのシャンソン歌手の石井好子さんを日南海岸に案内したが、コパノセンナの花盛りで、日本のコートダジュールね！と、嘆声をあげられたことをなつかしく思い出す。

海外の道路で、今も私に強烈な印象として残っているのは、道という道にエドモントンの町では、道という道にゴミ一つ落ちていないことに感動した。その代わり紅葉の季節で、赤や黄の濃淡さまざまの落葉が、道々を美しく飾っていた。

市の中心を流れるノース・サスカチュワン川の畔も走ったが、もし周辺にビルがなかったら、さながら原生林を流れる川を眺めるようだった。もちろん人口百万の大都市だから、治水対策は充分の筈だが、自然そのままに見せているのが絶妙だった。

エドモントンから、ジャスパール、バンフに

向かう延々八時間に及ぶロッキー山脈のバス走破には、涙が出るほど興奮した。山と森と川と湖、地球にはまだこんな広大な大自然があるのだという喜びでいっぱいだった。途中で飲んだ湧水の美味しさが忘れられない。

オーストラリアの旅の思い出も鮮明である。世界一美しいと言われるシドニー港。港の見える場所に住宅を建てるというのが、市民の夢だそうだが、屋根の色は明るい煉瓦色、外壁は白に統一され、まわりは緑の芝生に色とりどりの花々、観光バスで一周した住宅街の道は、私の目には観光道路として映った。

「県境」越えてルート間連携を 人材発掘、育成と資金確保の道探る

九州風景街道推進会議は8月21日、福岡市で基本問題小委員会（玉川孝道委員長）を開き①各ルートの活動内容を踏まえた支援の在り方②九州独自の評価手法の策定③九州風景街道の全体像と認知度の向上策、などについて意見交換した。

会議では、九州の9ルートについて活動状況とそれを踏まえた支援内容を検討。

日豊海岸シーニックバイウェイについて「県境をまたぐルートで観光上重要な地域だが道が分かりにくい。道路標識や案内板整備や情報発信、アクセスの向上が必要」。かこしま風景街道は「ブロックごとの取り組みは評価できるが、一層の連携が必要」などの要望があり、福岡都心のシーニックバイ

ウェイに取り組む玄界灘風景街道では「博多・天神地域は優れた資源があるが有効に活用されていない」などの指摘があった。これらの論議に基づいて、支援内容をルートごとに検討、支援する活動を決定した。

また、今後の九州風景街道の方向性についても意見交換。「九州風景街道の全体像を検討、それに沿ったルートの形成を行うべきだ」「その将来像を踏まえて、各ルートの足りない部分を明らかにし支援を行う」「九州独自の評価手法を作成したい」などの意見が出された。風景街道を発展させるためには人材発掘と育成が重要だが同時に「人材ネットワークをきづく」重要性も強調された。

将来像を確立するための方策（案）

具 体 的 な 取 り 組 み 内 容	
取 組 項 目	《1》 ルート間連携・ 新規ルートの開拓 ①ルート内各地域及びルート間の連携 ・九州風景街道全体像の把握・周知（圏境を越えた連携） ②新規ルート、新たな人材の発掘と連携 ・圏域外（風景街道未実施地域）における人材の発掘と新たなネットワークの構築 ・新たなルート承認手続きに関する支援
	《2》 各ルートの推進方策 ①各ルートの認知度向上 ・セールスポイント（売り）の抽出とアピール ・推奨観光ルートの設定 ・環境に視点を置いた取り組みの実施 ②来訪者に対する地域資源メニュー（観光、歴史、文化、食事等）の提供 ・来訪者に対する観光メニューの提供 ③ルート自ら資金確保する方策の確立 ・各ルート自ら資金確保する方法の検討（観光協会の活用、スポンサーの調達等） ④人材育成と推進組織の拡充（アイデアマンや意欲的な活動者等を発掘し推進体制を確立） ・取り組み（活動）を支える人材の育成 ・地元大学等との連携（日常的にアドバイスをもらえる専門家との繋がりを確保）
	《3》 九州風景街道全体の マネジメント ①九州風景街道（全体）の認知度向上 ・国民に周知を図る効果的な広報の検討・実施 ・九州版ロゴマークの検討 ②各ルートが抱える課題への対応 ・課題の共有化 ・九州風景街道推進室、日本風景街道九州ネットワークによる協働・助成 ③推進方策と連動した九州独自の評価手法の確立 ・他事例を参照した評価手法の検討（ドイツ バーデン ステップアップ式評価法） ・数値化できない取組の評価手法の策定 ・目指す将来像に合致させた評価手法の策定と重点支援方策への反映方法の確立

風景づくりの事始め①



福岡大学工学部社会デザイン工学科
助教 石橋 知也

私たち人間は日々の暮らしの中で無意識的に風景を捉えている。風景はどこにでも存在していて、時間による変化を考慮すれば一つとして同じものはないくらい実に多様である。しかしながら私たちは、例えば散歩やドライブをする際にはできれば景色の良いところをルートとして選ぶだろうし、ランチを食べるなら外の様子が見渡せる窓際の席に腰掛けるだろう。つまりこれらの行動は「良好な風景を体験したい」という欲求の現れと考えることができる。私たちは良好な風景から得られる豊かな体験をすることによって、利便性や機能性といった価値観とは別の次元で生活の質的向上を目指しているわけである。

それでは良好な風景とは一体どのようなものだろうか。端的に表現することは極めて難しい。それはなぜかというと、おいしい料理をつくるためのレシピのようなものがあって、それ通りに材料を組み合わせれば良好な風景ができあがる、というわけにはいかないからである。しかしながら、景勝地や観光地などの豊かな風景体験のできる場所が示すように、良好な風景もある程度共通の価値をもつて説明できる。つまり、より多くの人間が共感し共有の財産として保全したいと思える風景からは、豊かな景観体験が創出さ

「ちょっとした気配り」が 景観形成

れると考えられる。大切なことは、風景はその風景をつくり出す要素とそれを眺めている人間の両方が存在して初めて成立するものであるということである。

風景と言えば大自然を思い浮かべる方も多いだろうが、そもそも自然とは曖昧な表現である。結論から言おう。私たちの身の回りにある自然は、その大部分が人為の介入なくしては存在しないということである。森林や田畑、河川や海岸に至るまでなんらかの形で

人間の手が増えられている。やや表現が不適切かもしれないが、私たちを取り巻く環境の大部分に人為の介入があるとすれば、風景を良好に保つことも生み出すことも人間によって調整可能である。一歩間違えば、簡単に風景を壊し、失うことになる。いずれにしても風景は一朝一夕には変化しないから、長い年月をかけて向き合っていく必要がある。私たちの「ちょっとした気配り」の積み重ねが良好な風景を形成していくと言っても過言ではない。



秋月の並木道

宮崎 風景 街道を行く



シャンシャン馬

宮崎では、結婚すると鶴戸神宮（縁結びの神）へお参りをする風習があり、明治時代にこの風習が始まったと言われる。新婚夫婦が七浦七峠を越えて鶴戸詣りを済ませて帰



瀬平峠



古道篤巢

鶴戸街道

日南海岸線が整備される以前は、宮崎から日南を結ぶ鶴戸街道が中世末につくられた。

鶴戸街道は一般的には、宮崎市から日南市を結ぶ海岸沿いの古道のことをいい、七浦七峠の難所を越えて、鶴戸神宮へ参る道です。正確には中村（宮崎市）から城ヶ崎、赤江、南方、郡司分、熊野、折生迫と海岸沿いを南下し、七浦七峠をへて鶴戸までの十一里十二町（45km）と飢肥城下から鳥居峠をへて鶴戸までの三里八町（約13km）の街道だ。

鶴戸さん詣りで賑わう

江戸時代後期、農民等の人々は伊勢神宮や四国遍路、日向国内（宮崎県内）では鶴戸山など寺社参詣に出かけた。時期は農閑期、役所の許可を得て参拝に行った。日南の鶴戸神社には稲作が始まる前、春に数日かけて参ったことが佐土原藩の古文書に残っている。峠付近の茶屋、浦（宮浦集落）には宿屋が数件あったことが記録にあり、当時、鶴戸参詣の往来で街道が賑わっていたことが分かる。

シャンシャン馬が花嫁のせて



鶴戸神宮

日南海岸
鶴戸街道

街道に鳴り渡る鈴の音

鶴戸街道の復活を

現在、この風習は無くなったが、「シャンシャン馬」を再現する行事、民謡大会などが行われ、観光客を楽しませている。

現在、日南海岸線が整備される以前は、宮崎から日南を結ぶ鶴戸街道が中世末につくられた。鶴戸街道は一般的には、宮崎市から日南市を結ぶ海岸沿いの古道のことをいい、七浦七峠の難所を越えて、鶴戸神宮へ参る道です。正確には中村（宮崎市）から城ヶ崎、赤江、南方、郡司分、熊野、折生迫と海岸沿いを南下し、七浦七峠をへて鶴戸までの十一里十二町（45km）と飢肥城下から鳥居峠をへて鶴戸までの三里八町（約13km）の街道だ。



鶴戸街道（文化七己巳四月公儀測量方廻浦二付下調絵図）写真提供：日南市教育委員会



大師祭のおせったいの様子



今井一萬さん



七十六番からの景色



一番大師

宮野浦八十八カ所を巡る

日豊海岸沿いを走る国道388号の北浦町古江交差点から、北浦漁港に向かって県道に入り、カンパチの養殖網を右手に見ながら数キロ走ると、大きな弘法大師像が見えてきます。宮野浦八十八カ所の一番大師です。

江戸時代の後期、宮野浦地区では疫病や火災等が頻繁に発生したため、当時、上方との交易で莫大な富を得た宮野浦の住人・中野忠之丞は村人と共に八十八カ所の建立をせんと発心しました。四国八十八カ所の霊場の土を選び、四国の石を刻んで船で搬入して宮野浦八十八カ所の霊場が造られました。八十八カ所を巡るための遍路道は約12km。峠から海や島が見える道や崖下を見下ろす道、砂浜の道など景色を楽しむことも出来ます。「子供の頃は一面段々畑で、山頂には立派な松が自生し、見事な眺望でした。」と教えてくれたのは、この八十八カ所をお世話する中井一萬さん。中井さんは20年くらい前に大病を患いましたが奇跡的に回復。お世話になったお大師さんに感謝し、遍路道や石仏の手入れを行い、また厳しい修行を行って、いつの間にか宮野浦八十八カ所を参りにくる人々に頼りにされる存在となりました。

毎年、旧暦の3月21日（4月末頃）には大師祭が行われ、町内はもとより近隣や遠方からもたくさんの巡拝者が訪れます。この時、宮野浦の人々は、お接待というもてなしを巡拝者にします。巡拝の途中の各所で茶やお菓子、だんごなどがふるまわれ、子供の時はそれを貰ってまわるのが楽しみだったといいます。

食と食、人と人をつなぐ道

「東九州伊勢えび海道」は、伊勢えびの産地である大分県佐伯市と宮崎県延岡市が共同で展開している取り組みで、佐伯市上浦から延岡市浦城までの海道筋の食事処30店舗が参加しています。伊勢えび漁が解禁と

東九州
伊勢えび街道

「もてなし」と食材の魅力発信

ふえるリピーター

この東九州伊勢えび海道の発展に力を入れてきた「道の駅 北浦」の田村支配人。海道のPRを行う現地芸能人の1人として「塩屋浜七（通称浜ちゃん）」という芸名を名乗り、TVやラジオ、新聞、イベント等でPRを続けています。「ここ2、3年は海道全体で期間中1万2000〜3000人くらいのお客様が伊勢えびを食べに来てくれています。リピーターが多く、とても嬉しく思います。」と田村さん。国道388号沿いにある「道の駅 北浦」は、宮崎県の北端にあたり大分側からのアクセスが良くないため、お客様の目的となる道の駅として地域や食材の魅力を発信していく必要があると感じているそうです。

「干し物作り、クルージング、定置網、郷土料理等の体験が出来る北浦ブルーツーリズムもお勧めです。」現在工事が進んでいる東九州自動車道の開通後に、より多くの人を呼べるように地域づくりをしていきたいそうです。



下阿蘇ビーチをバックに「浜ちゃん」



道の駅北浦の伊勢えび料理



道の駅北浦

人としての「気づき」、 そして「続ける」ことの大切さ



北九州市八幡西区
小役丸シゲ子さん

小役丸さんが所属する、北九州市道路サポーター「みちピカ」は、今から三十年ほど前、すでに穴生市民センター（当時の穴生公民館）に集う様々なクラブ活動のメンバーによって、市民センター周辺の清掃活動を行っていました。小役丸さんは、その当時から、地域の変遷を見てこられました。

『「みちピカ」っていう名前は、穴生市民センターのスタッフが名付けたの』と笑顔で話す小役丸さん。彼女の周りには、多くの方が集まり、みんなを癒す存在。また穏やかな笑顔がチャームポイントのキュートな方です。

活動区域の近くには、交通量の多い道路があり、安全に気づけながら活動を行っています。そのため、道路脇のたばこのポイ捨てには特に悩まされています。小役丸さんは、嬉しそうにこんな話をしてくれました。

「先日、近所の道路工事の現場に『たばこのポイ捨て禁止』のポスターが貼ってあったんですよ。それまでは、たばこのポイ捨てがしょっちゅうあったのに、そのポスターを貼ってから、ずいぶん少なくなりました。やっぱり、そのポスターを見ることで、『ああ、捨てちゃいけないんだ』と気づいたんですね。」

人にとってみちは暮らしの一部。みちが続いていることに気づき、みちの大切さを感じている小役丸さんは、いつも、地域や市民センターに集う方達と一緒に、無理なく、楽しく、長く清掃美化活動が続けられるようにと心がけています。

「黄金の日南海岸」復活をめざす



宮崎市
長友睦郎さん

初代道守みやざき会議代表世話人である。昭和40年代の観光ブームだった頃の日南海岸の復活をめざし、自宅のビニールハウスで育てた「コパノセンナ」の苗は延べ一万本になる。毎年6月は、宮崎交通OBでつくる『日南海岸コパノセンナを育てる会』で、ボランティアサポータープログラムを利用してその苗木を国道220号日南海岸「いるか岬」付近に植えている。日南海岸のコパノセンナは道路の法面に特別なコンクリートの柵を作って植えられている。台風や大雨でこの斜面の土壌が流れるのを防ぐため、最下段部には宿根草のガザニアを植えた。秋にはコパノセンナで彩る日南海岸の黄金が楽しみである。

道路沿いに木や花を植えていくことは、勤めていた宮崎交通の社長で、宮崎観光の父、岩切章太郎翁が唱えた「自然の美、人工の美、人情の美」のうち、「人工の美」の極みでもある。昨年から堀切峠の山桜の手入れもおこなうようになった。

一方で自宅のある宮崎市希望ヶ丘地区の公民館活動として、近所の「高齢者お助け隊」を結成し、お年寄りの行き届かなくなった庭の手入れなどもおこなう。「人情の美」である。そして「自然の美」の一つである青島の「鬼の洗濯岩」の姿は今も昔も変わらない。こうして岩切イズムは、今も脈々と受け継がれている。

道守たちのトピックス

風景街道ネットワークを法人化 道守九州会議とも連携、支援 事務局長に榎谷秀秋氏が就任



榎谷事務局長

風景街道の育成支援を行っていく任意組織「九州風景街道ネットワーク」

を平成21年、最初に設立しましたが、支援強化に向けた今後、各種助成事業等への応募等にむけ法人形態への移行が必要になるため「一般社団法人・日本風景街道九州ネットワーク」を設立登記しました。

代表理事に榎木武氏（道守九州会議代表世話人）、副代表理事に堤昌文氏（西日本工業大学教授）、理事・事務局長に榎谷秀秋氏が就任。榎谷事務局長は地域づくり等に関するコンサルティングを長く経験、建設コンサルタンツ協会「夢アイディア交流会」も担当しています。監事は村里静則氏（NPO道守長崎）。

今後、活動ルート関係者や風景街道の育成支援をいただける方々などの会員募集と理事等役員の充実などの準備を経て、年内に発足総会を予定しています。

今後、活動ルートの皆様方との情報交換を深めつつ、九州地方整備局の風景街道推進会議や支援室の皆様とも連携し、九州の風景街道の発展を応援していきたいと考えています。

「護美の鳥居」で ゴミ投棄がゼロに



不法投棄をいさめる鳥居

道守佐賀会議の「多久市そうじの会」では毎月第3日曜日に一斉清掃を行っているが、いつも決まった場所に不法投棄がされており、仲間で悩み、アイディアを絞り、写真の「護美の鳥居」を設置したところ、不法投棄がなくなったとのこと。

不法投棄者にも、まだ神仏への敬いの心は残っているのかもしれない。

道守通信 編集後記

アサヒビール(株)九州統括本部様のご支援のもとで再発刊の運びとなりました「道守通信」、本号ではパナソニックシステムソリューションズジャパン(株)様のご支援も新たに賜り、宮崎での「みちづくし」開催にあわせた紙面の編集ができました。記事提供者のご協力のもと、編集委員も手作り編集に少しずつ慣れてきました。本通信が道守の皆様にとって活動のヒントになればと願っています。

【編集事務局】